様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３２５１１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2013～2014
課題番号：２５８８５０６９

研究課題名（和文）クエスチョニングの発達過程をめぐる縦断的実証研究

研究課題名（英文）A logitudinal study of the developmental process of"Questioning people"

研究代表者
荘島　幸子（SHOJIMA, Sachiko）

帝京平成大学・健康メディカル学部・講師

研究者番号：７０５７２６７６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、第一にセクシュアリティの発達過程の解明を目的とした質的調査である。なかでも、発達過程においてセクシュアリティが定まらず混乱模索中といわれるクエスチョニングの生態学的システムを記述した。セクシュアリティの気付きは対人関係（友人、パートナーなど）や所属するコミュニティ（学校、職場など）の活動を通じてもたらされていた。特に恋愛において自身のままならなさや内なる欲求が発現されている点が共通していた。異なるジェンダーを生きる自分の表現の仕方が定まらず、生き辛さを抱えていた。
第二に、今後、実証的縦断研究で用いる質問項目作成のための理論的検討を行った。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to clarify the developmental processes underlying sexuality by using a qualitative study. We identified the developmental state of “Questioning” (i.e., holding an undefined sexuality). One’s awareness of his or her sexuality arises through interactions with interpersonal relationships (e.g., friends, partners) and communities (e.g., school, workplace). In particular, romantic relationships can elicit gender dysphoria and the desire to be another gender. However they are uncertain about how to express another gender, and they are distressful.
This study also included a theoretical examination of contents of our questionnaire in future longitudinal research into sexuality development.

研究分野：臨床心理学

キーワード：クエスチョニング　性同一性障害　質的研究

１．研究開始当初の背景

（１）性的少数者は身体障害者や民族的マイノリティと異なり、外部からマイノリティであると判別できないことから「基本的には見えないマイノリティ」（石丸, 2011）といわれる。つまり、当事者本人による主観的判断のみによって、その人は性的少数者になるといえる。彼らの存在が「みえない」のは彼らを取り巻く社会からの圧力にもよるが、彼ら自身が自身のセクシュアリティに気付いたり、性的少数者としての自己の確立に長い時間がかかることにもよるだろう（例えば日高, 2005）。このような経緯からこれまで性的少数者におけるセクシュアリティの発達に関する研究はほとんど行われてきていない。つまり、自己のセクシュアリティのステータスが「未定」から「確定」へと辿る発達過程はいまだ明らかでない。なお、本研究では、「未定」段階において、性自認や性指向が定まらず混乱模索中の状態を“クエスチョニング（questioning）”呼ぶ。

（２）クエスチョニングは、思春期・青年期という自己を確立する重要な時期に「自分は他の人と何かが違っているようだ」という漠然とした違和感を持ち、「自分はフツウじゃないかもしれない」という怖れから、周囲の他者と折り合えずに孤独を深めることが多い。このことは自殺のハイリスクとなるだけでなく、その後の人生に負の余波を残す可能性が高い。彼らは学校生活のなかでいじめや他の抑圧を受けた場合に自殺念慮が高まり（APA, 2008）、また同性愛者や両性愛者の若者と比較して、虐待被害や自殺念慮、アルコールの過剰摂取や薬物乱用のリスクが高く、これは異性愛者や同性愛者および両性愛者からの疎外感に起因する可能性が指摘されている（Hutchison, 2010）。2010 年 5 月に文部科学省は、性同一障害をもつ児童・生徒に対し教育相談を徹底するように都道府県教育委員会に通達したが、性的少数者として過渡期にあたる時期であり、現場の教員らにとって「見えないマイノリティ」を支援することは気付きの限界（本渡, 2012）も指摘され、困難を伴うことが推察される。

２．研究の目的

（１）「未定」段階において、性自認や性指向が定まらず混乱模索中のクエスチョニングという状態ついて、彼らを取り巻く文脈（家族や友人、パートナーといった対人関係や職場や学校といった制度など）のなかで明らかにする。クエスチョニングの生態学的システムに質的に接近することが目的である（研究１）。

（２）今後、自らのセクシュアリティに違和を抱いている思春期・青年期の子どもたちの実態および発達過程を分類するための縦断研究を実施したいと考えている。発達心理学においてもセクシュアリティの発達を測定する尺度はいまだ開発されていない。クエスチョニングのようにセクシュアリティの移行が長期にわたる場合も考慮した質問項目を作成する必要がある。研究２では、質問項目作成のための理論的検討を行う（研究２）。

３．研究の方法

（１）調査開始前に帝京平成大学倫理審査委員会の承認を得た。①調査協力者のリクルート、②インタビューガイドの作成、③インタビューの実施、④関連研究のレビューが計画され、いずれも遂行された。調査協力者のリクルートにあたっては自助グループや性的少数者のイベントなどを中心にフィールドワークを行った。

（２）研究１　クエスチョニングという状態に関する生態学的システムの質的解明：

①性的少数者のなかでも、セクシュアリティの移行（MTF: Male to Female、FTM: Female to Male）が顕著にみられる性同一性障害の当事者を対象とした。フィールドワークを通じて 30 名ほどの当事者にヒアリングを行った。その後、セクシュアリティの確定までに他の者よりも長い時間を要した 3 名を理論的にサンプリングし、2 時間ほどの半構造化面接を行った。

調査協力者（年齢）	セクシュアリティ	身体的治療	職業
A さん（42 歳）	MTF(Male to Female)	なし	製造業勤務（うつ病で休職中）
B さん（23 歳）	MTF	なし	学生（大卒）
C さん（33 歳）	FTM(Female to Male)	なし	アルバイト

②分析方法：「セクシュアリティの決定は時間経過を含み、他者との関係性や環境との相互作用により生じる」という構成主義的仮説（荘島, 2008）に基づき、セクシュアリティの揺らぎというポイント（発達の契機）に着目して、3 名のライフストーリーの分析を行った。個人のセクシュアリティがクエスチョニングの状態から確定へと移行する軌跡を、彼らを取り巻く文脈（システム）とともに記述した。

（３）研究２　今後の縦断研究で用いる質問項目作成のための理論的検討：研究１で具体的に記述される生態学的システムに基づき、質問項目作成のための理論的検討を行い、セクシュアリティの発達過程を分類するために考慮すべき領域を見出した。

４．研究成果

＜研究１　クエスチョニングという状態に関する生態学的システムの質的解明＞

セクシュアリティ移行からみたクエスチョニングの生態学的システムの概要を述べる。

（１）思春期・青年期の身体違和の弱さ

MTF 当事者の A と B の場合、思春期・青年期の身体的変化はさほど気にならないこ

とが語られた。一般に性同一性障害の場合、自分の身体に対する強い嫌悪感が見られるケースが多い。また身体への違和感があることが自らのセクシュアリティを問い直す契機となることもある。しかし A は 34 歳の時に、B は 21 歳の時に、自分が女性であると自認するまでの間、身体違和感が強かった時期はほとんどないと語っている。とはいえ、違和感は幼少期から微弱ながら持続していた。B の場合は肌を露出することへの抵抗は幼少時から見られ、身体への嫌悪感はあるというもののそれは漠然としたものであったと思われる。また、身体への嫌悪感以外の苦しみが強かったと語っている。

C の場合は女性特有の月経や胸のふくらみに対する嫌悪感は思春期以降強くみられた。MTF と FTM では身体違和の強弱は異なるのかもしれない。しかし、3 名とも（望んではいると語られるものの）身体的治療を行っていない。

（２）対人関係や所属するコミュニティの中でのセクシュアリティの気付き

①恋愛関係：A、B、C の 3 名とも、他者との恋愛関係のなかで自己のセクシュアリティに対する気付きがみられた。A は 34 歳の時にある女性と付き合うなかで、自分が男性のジェンダーを押し付けられることが嫌で女性の役割を担いたい自己を自覚することになり、「ターニングポイント」と語った。対照的に B と C は、恋愛関係によって自己のセクシュアリティへの自覚が遅れることとなった。それは「男－女」の異性愛主義が恋愛関係の前提にあると思い込むことによるものであった。セクシュアリティの自覚を促進するもの、阻むものとして恋愛をめぐる出来事が存在していることが明らかになった。

②馴染みのあるコミュニティで変化することの難しさ

A は現在も平日（職場）と休日でセクシュアリティを使い分ける生活を送っている。休日のみ自分の望むジェンダーで過ごしている。勤続 22 年の職場で、これまで他者から認知されてきた自己を大きく変化させることへの抵抗（自分の中にもあり、会社にもある）と、急激な変化によって生じるであろう自他の戸惑いを回避させなければならないと考えてのことである。身体的治療を施せば外見は大きく変わることになる。周囲と折り合いをつけて生活していくことを優先するならば、身体的治療は受けられないのである。

B は自己表現という観点から身体的変化を躊躇している。「自分が女性であるということからどう自分を表現したいのか、どこまで変えたいのかというところはまだわかんないんで」と言い、「結局単純に女性のジェンダーに染まれば解決かっていうと全然そうじゃなくて」と悩んでいる。B は改名についても男性っぽい今の名前は決して好まないが、その名前とともに思い出があったから愛着もあり、改名に抵抗を示している。このことは自己の歴史や馴染みのあるコミュニティと切り離した自己形成の難しさを物語っているといえる。C も同様に、「簡単にこれまでの自分とさようならできない」と語っている。

（３）「らしさ」からの解放と緩やかな気付き

A、B、C ともに人生の一時期、「人となんか違うな」という漠然とした違和感を持ちつつも社会の常識的なレールを逸れずにその場で求められる「男性らしさ」や「女性らしさ」を纏い、生物学的性別で日常生活を送っていた。またその期間は比較的長期にわたっていた。B は「男性であるのが気持ち悪いなとは思っていたが女性として自覚していなかった時期はそれでも男として生きなきゃみたいな感じで。男性の文化の中で一応生きてたんですよね。たとえば服装とかはメンズ物を買うわけですよ」と語っている。B は、不登校の人が集まって通ってくるような高校で、「普通から外れてる感じということに対してわりかし寛容」な空気の中で、「多少女っぽい、男らしくない自分ていうのがちょっとずつ出てきた」とセクシュアリティの緩やかな変化を語っている。そうして、「ちょっとずつ（女としての）階段を上っている」のだという。セクシュアリティのステータスが「未定」から「確定」へと移行する過程は緩やかに進行するものであることが分かる。特にクエスチョニングの状態が比較的長いケースの場合、その過程は B がいうように「ちょっとずつ自分を認めていく、ちょっとずつ進んでいく」過程を辿るのかもしれない。

自分を認める過程では、他者からも認められる必要がある。この「ちょっとずつ」という語りは重要である。A、B、C は社会的なパスは望んでいないが、自分の身近な人たちには自分のことを理解してほしいと願っている。そして、「周りの関係のなかでちょっと、あなたの中の女性の定義をもうちょっと広めてもらえたらみたいな」願いを持っている（B）。他者から少し認めてもらえれば、自分を少し認められるのでらある。これが「ちょっとずつ階段を上る」過程なのである。

（４）どっちつかずに由来する生き辛さ

3 名とも性同一性障害専門の医療機関に受診しているが、途中でドロップアウトしている。カウンセラーとそりが合わなかったり、医療機関から受診を断られるなど理由はあるが、いわゆる典型的な性同一性障害事例とは異なるがゆえに継続受診につながらないと思われる。かといって、彼らのメンタルヘルスが良好であるとは言えない（実際 A はうつ病で休職中、B は自殺念慮を抱えて精神科クリニックに通院している）。それぞれ望むセクシュアリティが確定してはいるものの、その道筋が長かったために自分が身を置く社会や対人関係のなかでそれをストレートに表現することが困難な人々である。B はインタビューの後半、気持ちを吐露するように

「自分がトランスジェンダーであるということは、半分は考えるとすごく絶望的になり、すごい怖さみたいなのありますね。だから自分の身体とか周りから男性として識別されてそうなってしまうという、性別でやられてしまう（性別によって物事がうまくいかなくなってしまう）という現状から逃れられないことに対する恐怖、気持ち悪さ」を語った。必要なサポートが受けられるような環境や社会の整備が求められる。

以上の研究成果は、「セクシュアリティの決定は時間経過を含み、他者との関係性や環境との相互作用により生じる」という構成主義的仮説を支持するものであり、具体的な相互作用やセクシュアリティの移行プロセスを具体事例によって明らかにしたものである。国内外の研究ではジェンダーをすでに移行した性同一性障害の典型例患者を対象にした研究が多いため、身体違和感が強く現れるケースがほとんどであった。しかし、現実にはそもそも治療を必要としなかったり、治療からドロップアウトするケースも多く存在する。そういった者たちの発達過程の一端を本研究が明らかにした点は意義深い。今後は事例数を増やしさらなる検討を行いたい。

＜研究２　今後の縦断研究で用いる質問項目作成のための理論的検討＞

研究１をふまえて、今後の縦断研究で用いる質問項目を作成するための理論的検討を行った。質問項目はセクシュアリティの発達過程を分類するために作成されるものである。セクシュアリティの発達に関する縦断調査は国内ではいまだ行われていない。セクシュアリティは個人が置かれる環境（例えば文化など）に多分に影響を受けることを考慮すると、我が国で本調査を行うことに意義がある。想定される対象者は中学生、高校生、大学生である。ここでは１つ１つの質問項目を列挙するのではなく、質問項目の背景にあると思われる領域について述べる。

（１）セクシュアリティの発達過程において、考慮すべき領域は「自己内のズレ」及びその程度である。「自己内におけるズレ」はさらに２つの領域に分けられる。第一に「身体違和」である。ここに「身体違和との向き合い方」も含まれる。第二に「性役割／性表現における現実自己と理想自己のズレ」である。

（２）セクシュアリティの発達過程において、考慮すべき領域は「自己と社会のズレ」である。「自己と社会のズレ」はさらに３つの領域に分けられる。第一に、学校教育における性役割と適応感である。第二に、恋愛関係における性役割と適応感、第三に社会における性役割と適応感である。

（３）セクシュアリティの発達過程において、考慮すべき領域は「将来の性役割への期待」である。

（４）セクシュアリティの発達過程において、考慮すべき領域は「性指向」である。

上記４つの領域を理論的背景として、発達段階に見合った質問項目を作成する予定である。

＜引用文献＞

① American Psychological Association. Answers to your questions for a better understanding of sexual orientation & homosexuality. 2008, Retrieved from http://www.apa.org/topics/lgbt/orientation.aspx

②Hutchison, E. D Dimensions of Human Behavior: The changing life course, 2010, Sage publication.

③日高庸晴、ゲイ・バイセクシュアル男性の思春期におけるライフイベントとメンタルヘルス、小児内科、37 巻、2005、101-105

④石丸径一郎、性的マイノリティと「うそ」、こころの科学、156 号、2011、 66-69

⑤荘島幸子、「私は性同一性障害者である」という自己物語の再組織化過程－自らを「性同一性障害者」と語らなくなったＡの事例の質的検討、16 巻、2008、256-278

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計　2　件）

①荘島幸子、性的マイノリティ者とのインタビュー実践における“聞けなさ”を巡る一考、日本心理学会、2014 年 9 月 11 日、同志社大学（京都府・京都市）

②Sachiko Shojima, The self-formation of a mother with a lesbian daughter: from “accepting her child” to “self-innovation”, The Eighth International Conference on the Dialogical Self, 2014 年 8 月 22 日, The, Hague(The Netherlands).

〔図書〕（計　1　件）

①荘島幸子（分担執筆）、新曜社、物語と共約幻想、2015、200 ページ

〔その他〕

ホームページ等

http://www001.upp.so-net.ne.jp/sachiko-s/

６．研究組織

(1)研究代表者

荘島　幸子（SHOJIMA, Sachiko）

帝京平成大学・健康メディカル学部・講師

研究者番号：70572676

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：